

A Film of Loony's Lazy Life

秋田谷ミノル

私には片思いをしたことはあったが、恋人は居てたことがない。

私は告白したことがなかったが、人生のうちで三回されたことはあった。一人はゲイ、後は結婚してくれのこと。

十六歳の私こと少年は、全くそんなの考えることなく、恋人はロックの如く、毎日抱いて寝るは愛器ヴィオラベース。ミディアムスケールでアタック感が弱い、暖かい音を出してくれるコイツに首つ丈であったのは、某少女漫画に出てくるイケメンと同姓同名の友人からも絶賛されるほどである。

青森での高校時代、友人と呼べた人は指十本で足りるくらいだった。しかし友達の輪が狭かったからこそ、別にそういう話題をする必要が全くなかった。昼休みに四人集まったら、政治かロックの話しかしなかった。またはギターを弾いて過ごしていたりした。

三年生になったらバンドを集めて、学祭でうたっておどってやろうと考えていたが、三年生は模擬店の準備と調理に時間が掛かりすぎて、結局参加することが出来なかった。黄色い声を浴びることなく、私は一人ジャック・ブルースの物まねをしながら（主に弾き方）、大学に入ったらバンドを組んで、グルヴィーなロックを楽しむんだと妄想していた。（今日それは叶っていない

ない。)

そんな私にだって高校生の頃好きなき子は居たさ。そりゃみんな彼氏彼女がいるからさ、彼女の一人や二人欲しくなるのだよ。当時の私が夢中になっていたのは、ユズと言う女の子だった。私は彼女の固い体の柔軟の補助をしていた時に「痛い痛い！ 助けてー！」と言う叫び声を聞いて、急にサドになってしまい、過度な柔軟をさせた後、心にもやもやが沸いた。多分今迄でもっとも長く二年間それが続いた。しかし私は彼女に貢ぐだけ貢いで、何もしなかった。恐らく冷めてしまったのだろう。

しかし、私もそんなに冷めた男ではない。お互い両思いまで確認するまでの関係を築いたこともある。名前はクロエと言った。元々姉の友人の妹さんだったのよ様な気がするが、勉強などの面で一緒に過ごすことが度々あつて、別にそういう気持ちはお互いなかった。

某カンファレンスに彼女と参加した時、最終夜にダンスパーティーがあつた。私は特にそういう行事が苦手であつたため、男友達とダベながら終わりにしようと考えていた。例年なら男が女の子を誘うパターンが殆どだったのだが、その年に限って女の子が男を誘うという形式に変わっていた（前々から参加する男たちは積極性に欠けていた）。私はスポーツドリンクを飲みながらホールの端っこでちよこんと座つていたところ、「みるくん踊ろうよ」とクロエに誘われた。まあ一曲ぐらい良いかなと、彼女と踊った。その後私は「ちよつと休みたい」と言つて、彼女から手を離そうとしたのだが、彼女は私の手を絶対に放そうとしなかった。私もなんだか強く握つてしまつていた。三時間ぐらいずっと手と手を合わせて、汗かいてへトへトになるま

で踊った。私たちはその時に両思いだと感じた。

その後、私は我孫子、彼女は渋谷と離れた場所に住んだが、しばらくの間は毎日メールをやり取りした。しかし私が渋谷に行こうとしなかったものだから（理由は「右側通行防衛戦線」に記したと思う）、その内疎遠になって行き、ついにはメールが返ってこなくなつた。そして彼女は短大だったので、私よりも先に田舎へ帰つた。私はその後のことを知らない。

へタレな私は一年次、基礎ゼミがイヤでイヤでしようがなく、もう基礎ゼミの人とは関わりたくないと思つていた（理由は「右側通行暴政戦線」に記していたと思う）。一人だけ信頼できた友人以外とは関わらない大学生生活をしていた。その裏でネット上でのコミュニケーションにも嫌気が差して、ミクシーとスカイプを退会してしまつた。

その頃の一緒に住んでいた姉はパラノイアのようで、私に鉛筆やコンパスを投げってくるような狂い方だったので、あまり関わりたくなかつた。リアルでも一人、ネットでも一人、私は孤独を楽しんだ。

ある日、私は友人がやっているアマチュアラジオで、FPS（一人称視点のガンゲーム）をみんなで作らないかと誘われ、韓国産の今思えばヘラジカの糞のようなFPSを私はやり始めた。後にこの出来事が、私がPCゲームに手を出すきっかけとなつた。

それが三月の頃だったので、その後の五月に、私はCounter-Strikeと言われる、世界で一番競技人口の多いゲームと賞されているゲーム買った。中々強くなれなかつた。私はそれをパン

コンのスペックを原因と考えて、翌年期末考査が終わったその日に、秋葉原まで一人で行ってパソコンパーツを一式買い、当時としてはハイスペックなゲーミングマシンを作った。

私はそのスペックを生かして画面配信実況プレイをやった。配信をやっていた結果、少数であるが私にもファンが出来て、私はそういう人たちと協力系ゲームや対戦ゲームを楽しんだりした。毎日それが楽しくて楽しくて、毎晩四時までゲーム仲間と共に遊んだりしていた。

だから、三年次の時の私は、女性になんかミリ単位で興味がなかったと言っても過言ではない。私はゼミの先生にこんなことを言われたのを覚えている。

「みるのは彼女とか欲しくないの？」

それに私はこう答えた。

「少女マンガを読んでいるほうが幸せです」

四年次になっていきなり女性を意識し始めた。前々から頭が女脳だなと思っていたが、ついに女々しくなってきた。いろんなことで直ぐ傷つく自分になっていた。私はその惨めな気持ちになったときに、誰かに話すだけ話してスッキリできればなと思った。とりあえず、何か話した所で変なコメントをしてくる男は要らないなと思い、そういうお話が出来る女性を探していた。まあ、しばらくの間はパートのオバちゃんです事が足りていたが、気持ち別なほうで焦っていた。

大親友の某少女漫画に出てくるイケメンと同姓同名の友人に、彼女が出来た。そして一カ月

ほど別れた。そして恋愛の相談を私にしてきた。私は彼と大学卒業まではモテないブラザーズをしていけるものだと思っていたので、衝撃的だった。その恋愛相談された日は二人でカラオケに行ったのだが、なにか元気の出る歌を歌ってくれと言われて、「たま」と「ブルーフ&トランス」と「ロードオブメジャー」などを歌ってあげて元気づけさせた。歌ぐらい自由に歌わせてくれと思ったが、よっぽどの事だったんだろう。私はとりあえずゴハンを食べれば辛いことを忘れてしまう便利な体になっていたので、あまり同情できなかった悪人だった。それに丁度そのころ、志賀直哉「和解」を読んでいて、このようなことが書いてあった。

「大きな愛という言葉の内容を本統に経験した事もない人間が無闇に他人にそんな言葉を使うものではない」

恐らく恋人が居た事のない私がどうこう言える問題ではなかった。わたしは彼が何か言ってくるたび「ふーん」「へえ」「さあ」「分かんない」を繰り返して言った。友人にはものすごい妙な顔をされた。

そんな事があって、私も甘い蜜を吸って、快樂を味わってみたいわと思ったわけだ。

しかし、私にはそんな猶予も悠長なこともしている暇がなかった。卒論があった。自分との戦いに誰かを参戦させたり、同盟を組む余裕などない。

しかし、そんなときに限って魅力的な人が、私の目の前に現れるんだ。

世の中私の邪魔ばかりしやがる。私が何したって言うんだい。めまいがしてくるわ。反吐が出るわ。

バイトの後輩が最近彼女が出来たそう。私に彼女とのプリクラを見せ付けてきた。二人でキスをしているプリクラであった。

「先輩は彼女いないんですか？」

私の本心など知るよしもない後輩が、快楽気ままに私に訊いて来た。

「居ないどころか、そんな経験もしたことがない」

私は正直に答えた。後輩は意外だと言った。

「彼女ってどうやって作るんだい？」

私は結構深刻そうに訊いてみた。

「なるようになる。妹や弟が出来るように、自然になるようになります」

どうやら、私には良く分からない次元の話のようだ。

この時は後輩と二人でカラオケ屋に行くに途中だった。私はこのまま恋話をずっと聴いていても良いかなと思っていたが、ノロケ話になってきて、飽きてきた。ここは一つ趣向の変わった話をと、後輩にこんな話をしてみた。

「昔の中国人はこうやって漢字を作ったんだ。水の中を泳ぐものに『魚偏』、地を這うものに『獸偏』、空を飛ぶものに『鳥偏』。わかりやすいだろ。それ以外の動物はどういう偏を使ったと思

う？ 実は「虫偏」を使ったんだ。『蛇』や『蛙』って漢字があるだろ。蛇って虫じゃないのに、何故虫偏がつくのか。実は魚・獣・鳥以外の動物で、得体の知れないものと言う意味も込めて、虫偏をつけたんだ。蛇って地を這う動物だけど、毛が生えているわけでもないだろ。蛙だって、尾びれがあるわけでもない。だから虫偏を使ったわけだ。と考えると『独』って言う字。さあこれは獣偏と虫偏と一緒に組み合わせるのだが、なぜなんだろうか。これがわかったらカラオケ代、全部持ってやるわ」

特に難しい問題でもないと思ったのだが、後輩は真剣にこのなぞなぞの答えを考えていた。私はハハハと笑い、今日カラオケで何を歌おうか、ずっと楽しく考えていた。

余談

事実を元に色々書いてみたのだが、友達にこれは小説ではないと言われたので、多分随筆と言うことになるが、半分以上は虚言である。だから決してリア充みたいな暮らしをしていたとは考えてもらいたくない。